

はしがき——新たな松江を探る試み

今から三十年前、松江まちづくりプロジェクトと松江青年会議所の人たちが、地域の知られざる歴史を発見し綴った『松江余談』（松江今井書店刊、一九八九年）は、その後十年の間に六刷されるほどに人々に読まれた。「新しい松江」をさぐる試み」と帯にあるとおり、取り上げられた題材は、当時はあまり知られていなかった、ややマイナーなものが多かった。しかしそのほとんどは、現在、松江の歴史や民俗を語る上で常識と化しており、同書が「新しい松江」へと導いた役割は大きい。

私は、二〇〇八年三月下旬に松江に移り住んだ。その頃は、新たな歴史資料館建設の準備に携わるといふ意気込みもあって、島根県、とくに出雲地方や松江の歴史・民俗に関する書物を手当たり次第読破していた頃である。「松江ってどんなところ」という問いに、なにがしかのイメージを与えてくれたのが『松江余談』だった。地域に住む人々が、知られざる身近な歴史を発見し伝えていくという内容は印象的で、見つけ出す歓びと、それを伝えたいとする気持ちが素直に感じられた。

山陰の古都である松江は、現在、歴史的な個性に裏打ちされた街づくりが求められている。松江が松江たる所以は何なのか、松江の魅力とは何なのかを、私は掘り起こした歴史の断面から探り考えようとした。まだ松江に住みだしてわずかばかりの人間に、松江の何がわかるのかと言われればそれまでであるが、その間、松江の歴史を明らかにして展示し、普及していく博物館施設である松江歴史館

の開館準備と開館後の運営に携わったことが、この短い年月をなにより濃いものにしたことは事実である。その過程で、人々から忘れ去られ、埋もれていた松江の歴史を少しずつ掘り起し、そこに暮らした人々の生き方を探り、現代における意義を問い直すことを、ささやかながら行ってきた。

太平洋戦争末期、松江出身の岡田建文おかだたけふみの語った未来予想が、戦後現実化しつつあることに、民俗学者の柳田国男やなぎたくにおは「これから」に対する歴史学・民俗学といった学問の無力さを深く反省した（『作之丞と未来』）。それは本来、歴史学は未来予測を直接の目的としない学問であることによる（遅塚忠躬『史学概論』）。未来予測のためには、徹底した現状分析が必要となる。本書は、徹底した現状分析にまでは踏み込んではいない。この徹底した現状分析に、歴史学の成果が重なりあう時、新たな指針がみえてくるのだと思う。その意味で、未来を探るための素材を提供したにすぎない。歴史を掘り起こすことは、過去の人々の営為を見つめ直す作業である。見つめ直し認識することで、松江の個性が見えてくる。その個性は、松江の未来を探るための原動力となっていくものである。

本書は、私が悪戦苦闘して掘り起こした松江の歴史を、事あるごとに活字にしてきた六十六編の文章を一冊にしたものである。内容を時代順に並べることで、松江の成り立ちから現代に至るまでの歴史を知ることができる。どこから読み始めてもいい。新たな松江を探るための一歩を踏み出したい。

二〇二〇年六月

西島太郎

目次

はしがき——新たな松江を探る試み……………1

出雲国関係図……………10

松江市街関係図……………12

第一部 戦国〜江戸初期の出雲・松江

第一章 戦国時代の出雲……………16

1. 戦国大名尼子氏登場の背景——近江の対抗軸・出雲……………18

2. 正真の天下無双・山中鹿介……………23

3. 米原綱寛の尼子、御一家再興、戦……………29

4. 戦国時代の「灰火山社記」にみる『出雲国風土記』……………32

第二章 築城伝承を検証する——堀尾期の松江藩……………37

1. 老婆の記憶が紡いだ築城物語……………39

2.	山ではなく丘陵だった宇賀山	42
3.	松江開府の立役者・津田の田中又六	45
4.	堀尾吉晴出世の転機になった本能寺の変	48
5.	吉晴の子を悼む裁断橋物語	51
6.	松江の象徴・松江城の歴史	54
7.	松江城下町の形成と変遷	62

第三章 京極期の松江藩

1.	京極忠高が造った若狭土手の記憶	78
2.	出雲・隠岐・石見の三国を見据えた支配	81
3.	藩主忠高の恵まれた人脈	84
4.	松江藩の石見銀山支配	86
5.	忠高が最も信頼した家老・佐々九郎兵衛	88
6.	渡り歩く家老・大橋茂右衛門	90
7.	松江城下を揺るがす刃傷事件	92
8.	殉死する家臣	95

第二部 松平期の松江藩

第一章 松平家二二三三年の礎を築いた松平直政

1.	松江藩御用絵師が描く松平直政初陣図	103
2.	直政が繋ぐ信州松本と雲州松江	104
3.	松平家二二三三年の礎を築いた名君	107

第二章 多種多様な松江藩士のルーツ

1.	乱世最後の就活	113
2.	学問で仕官した松江藩儒の鼻祖・黒澤石斎	115
3.	自画自賛の石斎肖像画を読む	118
4.	石斎が山荘に掲げた「曲直」の扁額	119
5.	全国から集まる松江藩士	121
6.	家老乙部家に伝わる肖像画の正体	123

第三章 江戸文化を牽引した藩主と藩士……………125

1. 出雲愛にあふれる三代藩主・松平綱近……………127
2. 藩の財政を再建し、茶文化を發展させた松平治郷（不昧）……………130
3. 松江藩主松平治郷の藩政改革——改革は一日にしてならず……………132
4. 不昧の指紋が残る自作花生——治郷の所作を探る……………135
5. 江戸の文化を牽引した萩野信敏……………138
6. 殿様との深い信頼関係を示す月照寺の大亀……………139
7. 多くの著書をまとめた博覧強記の知識人……………141
8. 粋な江戸っ子を魅了した千社札の元祖……………144
9. 天愚孔平の千社札を読む……………146
10. 陶山勝寂が描いた松江藩士たちの瑞々しい姿……………148

第四章 藩政改革を成功に導いた「ものづくり」……………150

1. 失敗した「義田」政策……………152
2. 収益をもたらす「ものづくり」への転換……………154
3. 率先して進められた榎の木植樹……………158
4. 藩財政を好転させた御種人参……………159
5. 国益を生む牛馬の産地……………162
6. 藩財政のカラクリ……………165
7. 産業振興がもたらしたもの……………167
8. 藩財政を支える御用商人・桑屋……………170

第三部 明治・大正・昭和時代の松江

第一章 明治維新の経験……………178

1. 幕末松江の女丹お加代——莫連女から使女へ……………180
2. 松江四季眺望図が描く幕末明治の大橋界限……………186
3. 山陰の写真師第一号・森田礼造……………188
4. 松江藩士堀家にとっての明治維新……………191

第二章 松江から世界へ……………194

1. 島根県初の美術学校を開いた堀樫山……………196
2. アメリカにおける日本人写真家の開拓者・堀市郎……………198
3. 堀市郎の上京に影響を与えた小泉八雲……………201
4. 徐々に明らかとなる「写真の開拓者」堀市郎の活躍……………205
5. 堀市郎独自の作風の誕生……………206
6. 小泉八雲が西田千太郎に宛てた書簡から心情を読む……………208
7. 八雲・市郎・タゴール・中村元を繋ぐ肖像写真……………211
8. 堀美峯が描いた昭和初期の松江城下町……………213

第三章 最先端を行く出雲国の先覚者……………216

1. 物理学と気象学の天才・北尾次郎……………218
2. 北海道稲作の父・松村豊吉……………221
3. 松村豊吉が松江で樹立した世界の棉作レコード……………223

第四章 松江城下を歩く……………230

1. 写真家・植田正治の感じた松江……………232
2. 松江を形づくる要件としての水……………235
3. 黒い屋根の城下町……………237
4. 三度の地盤嵩上げの契機……………244
5. 船入のある武家屋敷……………246
6. 「松江村」表記から探る城下町の拡張……………251
7. 水売りから探る松江の風土……………253
8. 堀の水面に映る風景……………254

コラム 美保関沖で起こった軍事演習中の悲劇……………227

第一章 戦国時代の出雲

出雲国（島根県）の戦国時代を語るには、尼子氏の存在なくして語ることはできない。尼子氏は、守護京極氏のもと守護代として活躍し、その後、下剋上して戦国大名となり、さらに中国八か国の守護にまでなった。

この尼子氏の勢力拡大については、尼子氏の実力によるものとする見解と、もとの主家である京極氏の出雲国守護権力を引き継いだとする見解とが拮抗している。尼子経久は、永正五年（一五〇七）に京極家物領の京極宗済（政経）が、失意のうちに出雲の地で幼い孫に物領職や守護職を譲るにあたり、多賀経長と共に京極家の代々の証文等を預かり、以降、勢力を拡大させていく。室町時代の守護は、通常、京都にいて中央の幕府政治に関わる。そのため、出雲の地に京極当主が在国することなどはほとんどなかった。京極当主の宗済が、意宇郡の安国寺（松江市）にいたことが、尼子・多賀両氏に代々の古文書を預け、後見とする状況を生み出した。尼子氏登場の背景の一つは、京極氏当主が出雲の地に住んだ理由にある。

尼子氏は安来庄（安来市）を拠点として、美保関（松江市）を押さえる松田氏を十五世紀後半に制圧し、日本海・中海水運の要衝を支配下とすると、十六世紀前半には宍道湖西の塩冶氏を討滅し、奥出雲

の横田庄を押さえる三沢氏を圧迫するなど、勢力を拡大していった。しかし、全盛を誇った尼子氏も、永祿九年（一五六六）に毛利氏の大軍により拠点・富田城を落とされると、当主尼子義久は降伏した。山中鹿介や米原綱寛らによる尼子「御一家再興」戦が開始されるのは、三年後の同十二年からである。再興戦は、末次城、新山城と松江地域を舞台に繰り広げられるが、毛利軍の前に敗退する。米原綱寛は、尼子方、毛利方と立場を変えたが、再興戦では、尼子勝久が籠もる新山城と連携して、高瀬城（出雲市）を拠点に二年もの間、毛利軍と戦うものの陥落してしまふ。

鹿介は、因幡で再び蜂起し、織田信長へ援助を要請し、以後、織田軍の下で尼子「御一家再興」を目指す。しかし、織田軍の最前線である播磨上月城（兵庫県佐用町）での籠城戦では、織田信長が三木城（同三木市）攻めを優先したため、上月城は落城し、勝久は切腹、鹿介は殺害された。吉川元長はこのとき、鹿介を並ぶものがない優れた侍を指す「正真の天下無双」と評価した。

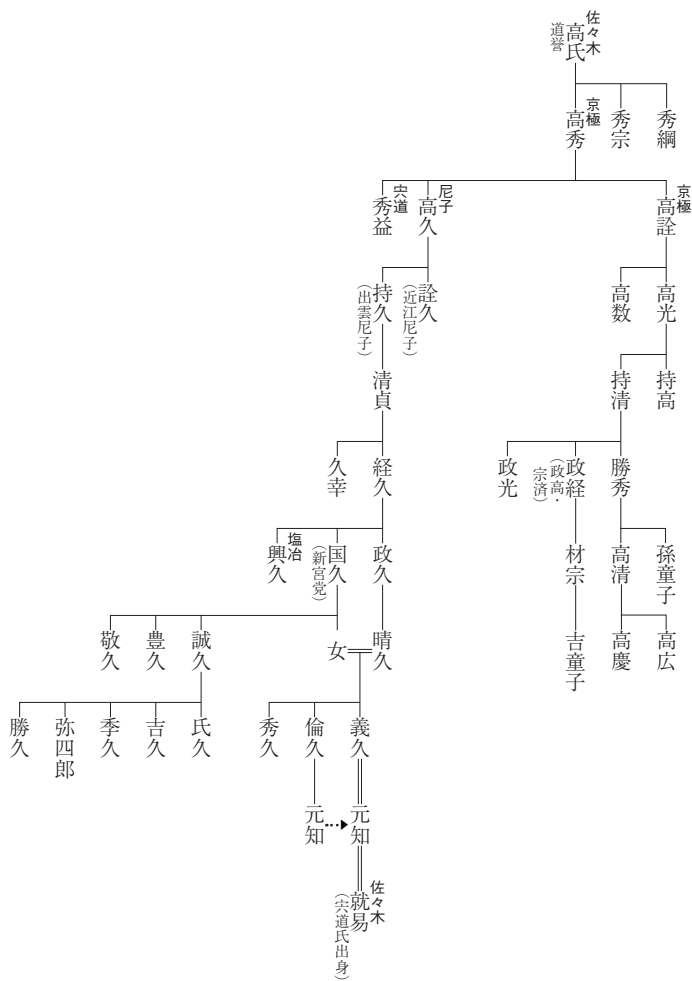
尼子氏が京極家代々の証文を預かった五年前の文亀二年（一五〇二）、奥出雲の最奥（最南）部に位置する馬来郷を拠点とする馬来氏は、愛宕山の神の祠堂を新たに建てた。この祠堂は、馬来氏が経営し、領内の安全を祈禱するために建立された。このとき、新たに祠堂に奉納された「灰火山社記」は、馬来氏が愛宕山の神を祀ることで、領内が無事であることを説く。その文中に、『出雲国風土記』を参照した記述がある。『出雲国風土記』は天平五年（七三三）の完成後、原本は所在不明となっており、慶長二年（一五九七）の奥書を持つ細川家本が書写年代の明確な最古の写本だった。だが、「灰火山社記」

の発見により、戦国時代の出雲国で『出雲国風土記』が利用されていたことが明らかとなったのである。「灰火山社記」はその後、富田、松江へと移り、古代にまで遡る由緒を持つ松江城下の火伏の神として機能していく。

1. 戦国大名尼子氏登場の背景——近江の対抗軸・出雲

戦国大名尼子氏登場の前提は何か。とくに重要と思われるのが、尼子氏が仕えた主家京極氏の領国に占める出雲国の位置づけである。室町時代、京極氏が守護となった領国は、出雲・隠岐（島根県）・飛騨（岐阜県）・近江（滋賀県）の四か国である。当初は京極高氏が上総（千葉県）、高詮が石見（島根県）の守護も兼ねたが一代で終わった。四か国のうち、近江は継続的に守護職を保持できず、明徳の乱前の山名氏守護期を除いた出雲・隠岐・飛騨の三か国が、継続的な京極氏の守護領国であった。

京極氏による出雲支配は、伝統的勢力の権限を重視したものであった。当初、守護代制度はなく、下部機構への伝達もない、伝統的勢力の相互関係の調整と国内秩序の維持のみが果たされていた。その後、十五世紀末の京極持清期に至り郡奉行が現れるが、実際には国内の伝統的勢力に権限行使を委ねる体制がとられた。このようななか、尼子氏が近江から出雲へと来たのである。



京極・尼子氏略系図

第一章 松平家二二三三年の礎を築いた松平直政

出雲国で藩祖と言われる人物は、何をおいても松平家十代、二二三三年の礎を築いた松平直政だろう。父の結城秀康は徳川家康の実子であり、豊臣秀吉の養子ともなった関係で、直政は二人の天下人を祖父に持つことになる。そのため、父から受け継いだ豊臣家の五三の桐紋を当初の家紋としていた。祖父家康や父秀康から譲り受けた品々に、葵紋を付すものがあるが、松平家が江戸幕府から正式に葵紋の使用が許されたのは、孫の綱近の代からである。結城秀康を発祥とする徳川氏支流の越前松平家は、秀康の長男の流れが津山松平家、次男の流れが福井松平家、三男の流れが松江松平家となるため、幕末に至るまで福井・津山・松江三藩の繋がりは強かった。

直政が信濃国松本（長野県松本市）から松江へ移封されたのは、九州で起こった島原・天草一揆を契機とする。外様大名ばかりの中国地方に徳川の流れを汲む家を置くこと、及び周防・長門の毛利家当主の正妻が直政の実姉であることから、毛利家の相談役となることを幕府が見込んでのことであった。また、靈元天皇即位の大札で、直政は將軍名代として江戸から上京し、参内する榮譽に浴している。靈元天皇やその姉の明正上皇は直政のいとこ違いにあたる。

直政は、藩祖として神格化される。なかでも、十四歳で迎えた大坂冬の陣での初陣は、真田信繁（幸村）の籠もる真田丸に単身攻め込み、直政の勇猛さを真田家も認めた。このとき信繁から投げ与えられたと伝わる真田軍扇を、後の松平治郷（不昧）は大坂の陣後に真田家から拝領したものとみている。松江藩の馬駿（紺地に丸を白抜きした、紺地白餅や白地黒餅）は、このときの故事に因む。

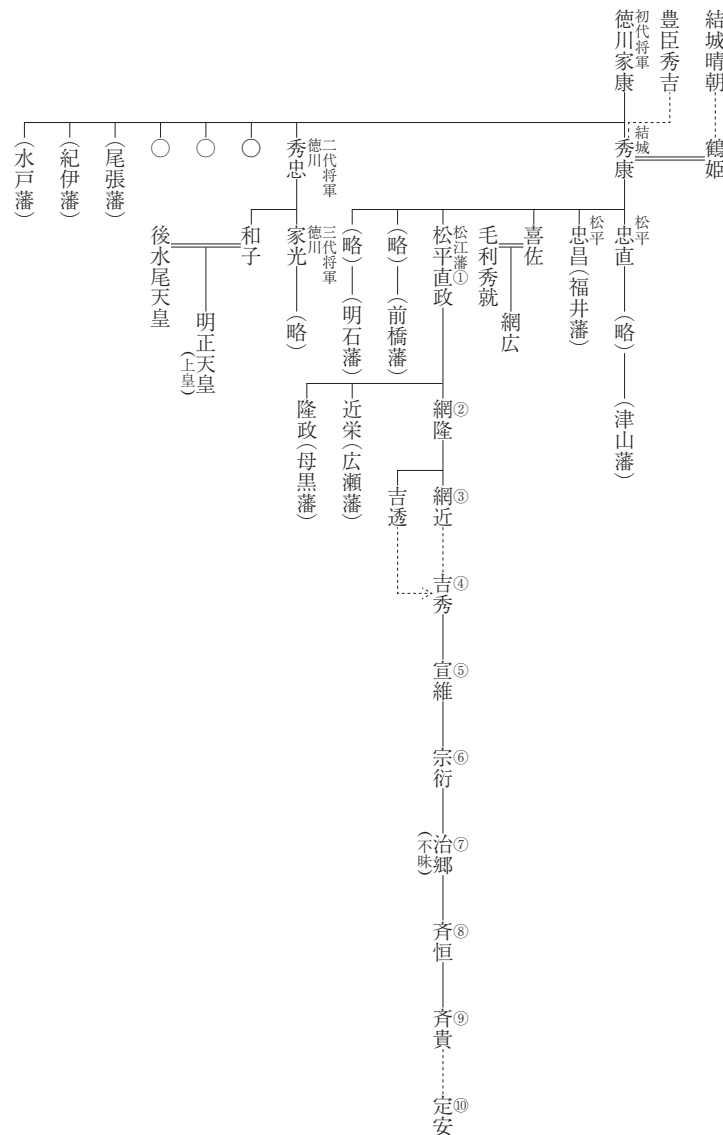
直政がまず取り組んだことは、前代の京極氏の事業を引き継ぎ完成させることであった。第一部で触れた、若狭土手や日御碕神社社殿、松江城下の雑賀町の造成などである。このようななか、林羅山の弟子で、幕府が諸大名の系譜をまとめた『寛永諸家系図』

の弟子で、幕府が諸大名の系譜をまとめた『寛永諸家系図』編纂に関わった黒澤石齋を儒者として登用したことは、その後の藩政の指針を形作る上での起点となった。杵築大社（出雲大社）が、尼子氏時代の神仏習合の形態から、完全に仏教を排除した神仏分離を果たしたのも、直政と石齋の意向が大きい。石高も、堀尾・京極両氏が二十万石台としていたものを、幕府との合意により十八万六千石と少なくして、幕府からの諸課役（人夫役や軍役）の負担を少なくしている。

また、直政が増築した松本城天守の辰巳櫓と月見櫓、居住した松江城天守は共に国室に、造営した日本最古の神明造りの仁科神明宮（長野県大田市）、日御碕神社社殿もまた国の重



松平家伝来の徳川家康の陣中守護本尊 家康が戦いの際、常に共にしたが、松平直政が譲り受け、この本尊を伴い大坂の陣に臨み勝利を得た 松江歴史館蔵



松平家関係系図

要文化財として現存する。

ここまで簡単に松平直政の事蹟を述べてきたが、以下、本章では直政の事蹟をより詳しくみていくこととする。

1. 松江藩御用絵師が描く松平直政初陣図

松江藩主京極氏は、わずか一代・三年半で嗣子なく改易となった。京極氏の改易後、外様しかない中国地方に、江戸幕府は徳川家康の孫・松平直政(一六〇一〜一六六六)を送り込む。

直政には出雲に入る前の若年の頃、後世語り継がれる名将・真田信繁(幸村)との逸話があり、藩の御用絵師・陶山勝寂は、その場面を何度も描いた(次々写真真。その場面とは、慶長十九年(一六一四)に家康が大坂城の豊臣秀頼を攻めた大坂冬の陣である。このとき、直政は十四歳。兄松平忠直のもとで初陣を飾る。初陣を前に、直政の母・月照院は直政を励まし、月照院自ら甲冑の下に着る服を縫い、布に墨で丸を描いて直政の馬駿として与え、名香を懐中に入れさせ、名が後世に薫ることを願った。

初陣の出撃先は、真田信繁が護る真田丸であった。越前松平家や加賀前田家の軍勢が攻めあぐねるなか、一人、直政は先駆けを敢行、真田丸の堀に乗り込み木戸際に攻め寄ろうとし、人々を驚かせた。